
嘘つきDays

月見 岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つきDays

【Nコード】

N0620G

【作者名】

月見 岳

【あらすじ】

エープリルフル。そんな日に僕は、後輩に呼び出された。

あれはそう、季節外れの雪がちらつく日だった。

その日は四月の初日でありながら、尋常じゃないくらいに寒かった。テレビでは、一月上旬の寒さを記録したとか言っていたが、今年の一月はそんなに寒かっただろうか……？

イギリスのテレビ局みたいに、エープリルフルだから嘘言ってるんじゃないか？

まあ、この寒さ自体が嘘みたいな感じだけれど……。

「ああ、寒い……」

既に春服に衣替えをしていたので、再びコートと冬服を引っ張り出したのだ。

マフラーを首に巻いているが、昨日まで春っぽい暖かさに浸かっていた体は、季節外れの寒さに慣れてはくれない。

どうやら、この季節外れの寒さは、人々を引きこもりにさせたようだ。

いつもなら人が多い商店街も、人はまばらだった。

そんな時に、何故僕は外にいるかというと、昨日夜に電話で後輩に公園に呼ばれたのだ。

僕だって、好きで外に出ているわけではない。朝に、後輩に後日でもいいかって電話しようとしても、電源を切っているのか繋がらないし、仕方がなかったのだ。

「はあ……」

自然と出たため息は白かった。

息を吐いて、かじかむ手を温める。

「ややっ！そこにいるのは冬葉（フユハ）じゃないかい」

ある一件のお宅の前を通り過ぎようとした時、僕を呼ぶ声がした。その声の方向を見ると、ひとりの少女が窓から身を乗り出し、手をブンブンと勢いよく振っていた。

さっき起きたばかりなのか、ピンクのパジャマ姿のようだった。

冬葉というのは僕のことである。

ユキシロ
雪代 冬葉

それが僕の名前だ。

地元の高校に通い、もうすぐ高校二年生。16歳だ。身長は割と小柄、体格も細めといった今後の成長に期待といった生徒だ。

これといって問題はない筈である。

これは、あくまで自分自身の評価なので、周りはどう評価しているかは知らない。

「冬葉あゝ。どこか行くのおゝ？」

「ああ、後輩に昨日呼ばれてな」

「後輩……なっちゃんのこと？」

「そうだよ」

なっちゃんというのは、後輩のあだ名で、僕が中学時代に所属した部活では皆にそう呼ばれている。

確か、もうすぐ僕の高校に入学してくるはずだ。

「いつまでそんな格好でいるんだよ風音。^{カザネ}風邪引くよ」

「今着替える。ちょっと待ってて」

そういうと、窓から体を引っ込めた。

僕は、待たないといけないのか？

この間に説明しておこう。

さっきの女の子は海原^{カイバラ} 風音。僕と同年でクラスメート。昔からの仲で、幼なじみというものだ。

ショートカットで、見た目どおりにとっても活発的で、学校では陸上部の短距離エースだ。

一方僕は、美術部の文化系だ。もちろん、運動はからっきしだ。

「……さむっ」

冷たい突風に体を震わせる。

心なしか、雪も強くなっている。

こんなことならカイロを持ってくるんだった。

「おっはよー！」

バーンという音を立てドアが開くと共に、風音が出てきた。

赤いセーターを着込んでいる。

「冬葉さんや、どこに行くのかね？こんな朝っぱらに」

「朝っぱらって……もう10時なんだけど」

風音が寝坊助なのは昔からだけど、今になっても治ってはいないよ
うだ。

よくもまあ、高校一年の間、遅刻しなかったことだ。

「そんな事はどうでもいいのだよ。でで、今から後輩ちゃんとデートかい？浮気はだめだよ冬葉」

「デートじゃない。第一付き合っていないから」

「だよね、冬葉にはボクがいるもんね！」

そう言っ、風音は僕に抱きついてきた。
僕の腕に、柔らかい感触を感じる。

「ねえ、胸当たってる」

「それは違うよ。知って当ててるのだよ」

「そう……」

もう少し、乙女として恥じらいを知ってもらいたいものだ。
少々、腕に感じる感触に戸惑いながら風音を引き剥がす。
また大きくなったんじゃないか……？

「僕は行くよ。時間ないし」

「ムムウ……なら仕方ない。浮気しちゃだめだよ？」

「浮気って……まあいいや」

僕は、苦笑いをしながら風音と別れた。
季節はずれの寒さが身にしみた。

○

後輩が指定した公園に着いた。

本来なら、春休みの子供達が駆け回って遊んでいるのだろうけど、この季節はずれの寒さには、流石の風の子も家に籠もることにしたのだらう、誰もいなかった。

僕は自動販売機でホットの紅茶を買い、近くのベンチに座る。

公園は、遅めの桜が咲き乱れ、花びらを散らしている。

この寒さで、一気に散ってしまうだろう。

僕は、紅茶を手の中で転がして暖まりながら、公園の桜を眺めていた。

「……先輩」

か細い声が聞こえた。

見ると、俯いている女の子が立っていた。

ロングヘアで、大人しそうな雰囲気の子だ。

一応、心当たりはあるが、あまりに変わっていて自信がない。

「……後輩？」

「はい、そうです……」

僕が知る後輩は、ツインテールで風音までとはいかないが活発な娘で、少々抜けていることがあって、やる気が空回りするような娘なはずだ。

「先輩……似合いますか？」

「うおう、似合うよ。誰か分からないぐらい」

「良かった……」

ホッと息を吐く後輩。

そんなに緊張していたのだろうか？

しかし、後輩はまた顔を強ばらした。

「先輩、お聞きしたいことがあります」

「何だい？スリーサイズは遠慮して欲しいな」

「その……海原先輩とはお付き合いしているのですか？」

どうやら、僕の間を和ませようとした決死のボケは、スルーされてしまったようだ。

これでは、自爆したようなものじゃないか。

「……先輩？」

「あ、ごめん。風音のことだったよね」

「はい」

「風音とは幼なじみだよ。付き合っていないよ」

「良かった」

再び、ホッと息を吐いた。

「先輩！」

いきなり、後輩が声を張り上げた。

何やら決意したような様子で、少し頬を赤らめている。

スカートを握りしめ、目を瞑ってフルフルと体が震わして、そして

――

「好きです。先輩のことが好きです！」

僕は、突然の事に咂然とするしかなかった。

懸命に告白する後輩に、花びらを散らす桜、そして舞い落ちる雪。

それらの相乗効果でとても美しいモノだった。

まして、桜と雪の共演での告白というロケーションは、予想以上に破壊力があつた。

しかし、今日はエープリルフル。嘘かもしれない。

だけど、端から見ても分かるくらいに緊張して、必死に気持ちを伝えようとしている。

「念のために聞くけど、今日はエープリルフルだよ？」

「私の気持ちに嘘はありません！本当は、合格発表のときに告白しようと思っていましたけど、色々と訳がありました……」

最後の方は聞き取れなかったけど、嘘じゃないことは分かった。

これは非常に面倒な事態になった。

至って正常に、後輩の告白のことを受け入れたこと自体に、僕は自分自身の神経の図太さというか、順応の高さなどに驚いた。

「後輩。君の気持ちは素直に嬉しいよ。だけど」

人に好きになってもらえるが嬉しいことに、嘘偽りは全くない。
しかしだ。僕は後輩に言わなければならぬことがある。

「僕は君の気持ちに応えてあげることにはできない」

「そんな……」

「何故なら、僕は――」

女の子なのだから

○

「……………へ？」

あまりに唐突すぎる僕の告白に、後輩の目が点になった。何を言われたかいまいち分かっていないみたいだ。

……当たり前か。

「……信じらんないと思うけど、本当なんだ。家の掟でね」

そして、僕は語り始める。我が家の掟の出来たわけを……

――時は、江戸時代前期までさかのぼる。

その頃、雪代家は地元で唯一の酒屋として続いており、結構な財を

得ていた。

しかしある時、事件が起こった。

後継ぎが酒樽に落ちて死んでしまったのだ。

そこで、当時の当主は、まだ幼かった孫娘を男として育てることにした。

孫娘は立派に育ち、いよいよ後継ぎとして当主の座につこうとしていた時に、行方知らずになっていた亡き後継ぎの兄が息子連れて戻った。

後継ぎで雪代家はかなり揉めたが、後継ぎ最有力候補だった孫娘が女であることが発覚し、結局後継ぎは亡き後継ぎの兄の息子となることになった。

今までのことが水泡ときした孫娘は悲観し、首を吊って自殺してしまった。

その後、雪代家では不幸が続いた。

当主が病にかかったり、後継ぎが怪我をしたり、死産が続いたり……。

これを、孫娘の呪いと思った雪代家は、お祓いをしてもらったが、効果はなかったようで、当主が病で亡くなり、後継ぎが当主の座に座った後も、雪代家は呪いに苦しんだ。

当主は、子宝には恵まれたものの、全員が女の子で、後継ぎ問題が再燃。結局、長女を男として育てることになり、その長女が当主の座に座った途端、雪代家の不幸はパツタリ止んで、酒屋として発展していった。

呪いが止んだのが、男装した女が当主の座に座ったからだとふんだ雪代家は、その後、長女を男と育てるようになった。

これが現代まで伝わっていき、この僕、雪代 冬葉も男として育てられたのだ――。

こんな感じの話^{せってい}を情感こめて物語ってみた。

「あ、あの……先輩。嘘ですよ？嘘ですよ！？」

青ざめた表情で、切羽詰まっている。

僕に食いかからんという勢いで迫ってきた。

「残念だけど、ね」

「そんな……まさか……！」

「ウチの学校は水泳が無いからね。体育の時の着替えだってシャツを着ていればバレないものだし、胸はサラシを巻けばいいしね。それに、僕の胸は発育が悪いんだ」

「だ、騙したんですか!？」

「騙した？思い出してみなよ。僕がこれまでに男だって言ったかい？」

僕の言葉に、後輩は無表情で考え始めた。

僕と後輩が出会ってからのことを思い出しているのだろう。

「……………!……………っ！」

長い沈黙だった。

時間がたつ事に、後輩の顔が面白いぐらいに引きつっていく。

「……………う…そ…」

後輩は、愕然としてよろめいた。

そう、僕は今の一度も自分の性別を言及したことがないのだ。

「確かに先輩は華奢だし背も低いですし……声も低くなくて女の人と言われても違和感はありませんけど……でも……そんな……」

僕は、黙って首を振った。

「で、ででも！先輩は自分のこと僕って言いますよね！女の子じゃ……あっ」

僕にもう一人、一人称が《ボク》の女の子がいる。それを思い出したのだろう。

「そう、僕も風音もボクっ娘っていう奴なんだよ」

「……そう！海原先輩は知ってるんですか！この事を！」

「知ってるよ。物心つく前からの幼なじみだしね」

僕がそう言うと、後輩はフルフルと体を震わして、今にも泣きそうな顔で僕を見る。

「じゃ、じゃあ、私の気持ちはどうすればいいんですか！」

そう言う後輩に、僕は優しく微笑んで、

「お姉様とか百合な関係でもいいなら、僕は別にいいよ？」

「そんなの嫌ですぅー！！」

後輩は、泣き叫びながらダダダと逃げるように走っていった。

恋って夢いものなんだね。

これは失恋になるのかな？失恋になるんだろうなあ。

これをバネに、新たな恋でも見つけて欲しいものだ。

それにしても、後輩は意外と足が速いな……。風音が見たら陸上部にスカウトするだろうな。

「ふう」

僕はため息をついた。

息はまだ白い。

……それにしても、本当に信じちゃったな、後輩。

普通、いきなり女の子だって言っても信じないだろ。男装した女の子なんて、漫画とかフィクションにしかない。

それに、今日はなんて言ったってエープリルフールなのだ。

「冬葉！」

突然かけられた声に振り向く。

公園の出入り口に風音がたっていた。

マフラーを首に巻き、傘をさしている。

「今、なっちゃんが物凄い勢いで走っていったが、もしかして冬葉が原因かね？」

「んー、そうだろうね」

「全く、女の子を泣かしちゃいかんよ？」

「ハハッ、善処するよ」

すっかり忘れていたけど、手に持った紅茶はすっかり冷め切っていた。

プルタブを開け、紅茶を飲む。うん、冷たい。

「冬葉、帰ろうか。今日は冷える」

「そうだね」

僕は、そのまま風音の横を歩き始める。

雪と桜吹雪が舞い落ちる。それは儚さを感じさせる美しさ。花火と同じ一瞬の美。そう僕は感じた。

美しさなんて、一瞬の出来事だ。

「なんてね」

僕がこんな感傷に浸るなんてね。

「冬葉、風邪引くよ」

風音はそう言うと、僕の頭上に傘を出した。

確かに、僕は傘を持っていないし、頭は雪が溶けて冷たかった。

正直、有り難い。

風音と相合い傘という形になったけれども。

傘を奪うなんて、紳士な僕には出来ないことだ。

……ところで、結局のところ僕の性別が本当はどっちかと言うと――

「冬葉」

不意に隣を歩く風音から声をかけられた。

「実は、妊娠した」

「ハァ！？誰の！？」

風音が妊娠！？

いつの間にそんな関係が！

僕は、一気に混乱し始めた。落ち着けと言うのが無理な話だ。

「えっと、なんかおめでとう！結婚は？出産日は？今どれくらい？
相手は誰？いや、なんか本当におめでとう」

パニックを起こす僕を見て、風音は吹き出した。

「プツ、クフフ。ハハハハ」

「えっとなんか……って、なんで笑って？」

「嘘だよ嘘。ボクの可愛い冗談だよ」

「なんだ嘘か……」

「エープリルフルだよ。びっくりしたかね？」

「びっくりしたよ」

風音にいつの間にそんなマトモな相手が出来たんだろうってね。

「フフフ、ボクには冬葉しかいないんだからね」

「そうですか。それは嬉しいなあ」

「そうだよね」

そう言うと、風音は僕に抱きついてきた。

風音は片手に傘を持っているから、ちよつと危ない。

「歩けないよ。寒いし早く帰ろう」

「なら、ボクが暖めてやろう」

「うわっ、離れてってば」

僕は何とか風音を引き剥がした。これで今日は二度目だ。

気のせいだと思うけど、手に持った紅茶が少し温もりを持った気がした。

「ねえ、冬葉」

不意に風音が立ち止まって僕の方を向いた。

「これから一緒に進んでいこうね」

唐突に、当然のように。なんの当てもない事を言い放った。

これからも一緒なんていうのは無理なことだ。誰だって人生には分岐点があって、出会いがあれば別れがやってくる。

当然、僕と風音にも別れがくるだろう。そのことは風音も知っているはずなのに、あんな事を言うことが出来るなんて、僕には真似することはできない。

それ故、憧れるところでもある。

「全く、適わないな……」

僕はくたびれたような笑みを浮かべて、ため息をついた。

……そういえば言い逃したが、結局のところ僕の性別が本当はどちらかというのは……秘密だ。

その方が、面白みがあるしね。

「冬葉、何してるの」

「ああ、今行くよ」

いつの間にか、風音は先に進んでいた。

風音の笑顔が僕にとっても眩しい。

風音は僕にとって太陽だ。僕を温かくしてくれる太陽。

いつか、その太陽がなくなるのは、少し寂しいし悲しい。きっと僕は冷たくなってしまおうだろう。

だから、僕は今という時間を大切にしたい。

生きる中で、とても短い青春のこの時を。生きてきた中で、一番温かいこの時を。人として、少しずれてしまったこの僕はそう思うのだ。

ああ、本当に青春って素晴らしい。

……なんて、嘘だけどね。

（後書き）

連載を読んでいただいている人はこんにちは。お初の人をはじめまして。

どうも、月見 岳と申します。

ちよっと気晴らしに短編を書いてみました。

構成に一時間、執筆に二日。ハイスピードです。（自分にとってみれば）

時期的に間違っている（現二月）のは分かっているんですけど、思いついちゃったんですよね……。

そんなこんなで書き上げました。

もし、「あれ？こんな感じの小説読んだことあるな……」と思った方がおられたら、その方は胸に手を当てて深呼吸したのち、その思ったことを抹消してください。気のせいです。

……冗談です。ちよっとしたお茶目です。あとがきに書くことがなかったもんですから。

それにしても、青春か……。

自分なんか、高校時代は青春って感じがしたのは『18切符』ぐらいたもんな……。当時の小遣いではかなり厳しかったんだけど。

その後しばらくは大変だったな……。 （遠い目）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0620g/>

嘘つきDays

2010年12月9日06時29分発行